

情報解禁 なし

配布先：京都大学記者クラブ、大阪科学・大学記者クラブ、文部科学記者会、科学記者会

## NEWS RELEASE



2024. 7. 8

報道関係者 各位

<配信枚数3枚>

### 旧ジャニーズ事務所性加害問題をめぐるニュースメディアとX（旧Twitter）の反応を ビッグデータから明らかにしました

立命館大学の谷原つかさ准教授、ニューヨーク大学修士課程（研究当時）の入原充輝さん、横浜国立大学の村山太一助教、筑波大学の吉田光男准教授、東京大学の鳥海不二夫教授、インディアナ大学ポスドクフェロー（研究当時）の宮崎邦洋さんの研究チームは、2023年に社会問題となった旧ジャニーズ事務所性加害問題に係るニュースメディア、ソーシャルメディア（X）における議論の盛り上がりについてビッグデータを用いて分析し、沈黙のらせん理論<sup>※1</sup>の現代的再解釈を行いました。本研究成果は、2024年6月28日（日本時間）に国際ジャーナルの「PLOS ONE」に掲載されました。

#### 本件のポイント

- ソーシャルメディアのユーザは、ニュースメディアと比較して、旧ジャニーズ事務所性加害問題をより早く取り上げたことが示された
- スキャンダルをめぐって、旧ジャニーズ事務所のファンは分断されていた
- 少数意見を不可視化するとされていた沈黙のらせんが、むしろ少数意見を増幅する装置として機能していた

#### ＜研究成果の概要＞

旧ジャニーズ事務所性加害問題に関しては、2023年3月のBBC報道の後、Xユーザによって沈黙が破られました。その後、スキャンダルを糾弾することが多数派となります。そしてその後のタイミングで、ジャニーズ事務所を擁護するというハードコア層<sup>※2</sup>が生まれました。これを担ったのはジャニーズ事務所のコアなファン層でした。

つまり旧ジャニーズ問題に関する世論のプロセスでは、多数派意見の逆転現象が起きていました。問題が可視化されていないうちは少数派だった旧ジャニーズ糾弾の世論が、主要メディアによって報道された後、多数派となりました。そして今度は旧ジャニーズを擁護する世論が少数派となりました。

このことが示唆することは、沈黙のらせん理論の意味の拡張です。すなわち、ソーシャルメディア時代においては、たとえ少数意見であっても、エコーチェンバー<sup>※3</sup>によって、自分の周囲において自分と似た意見が可視化された結果、孤立の恐怖を感じにくくなり、意見を発信しやすくなるのです。

#### ＜研究の背景＞

ジャニーズ性加害問題は歴史の深い問題です。古くは1980年代に告発本が出るなど、少しづながら問題提起を行う者がいました。しかしこの問題が社会で広く取り上げられることがありませんでした。つまり、「沈黙」状態にありました。

2023年3月、イギリスの公共放送BBCは、「J-POPの捕食者 秘められたスキャンダル」というドキュメンタリー番組を放送しました。このドキュメンタリー番組は、日本において、性加害が問題化されないこと、未だ沈黙を保っていることそのこと自体が、「なにより恥すべきこと」と痛烈に批判をしていました。

本研究では、日本のニュースメディア、ソーシャルメディアはこの問題にどう向き合ったのかを探索しました。この研究により、ニュースメディアとソーシャルメディアが相互に絡み合って世論形成が行われていくダイナミズムが明らかになりました。

### <研究の内容>

ニュースメディアとソーシャルメディアのビッグデータを分析したところ、以下のことが明らかになりました。

- ・ ニュースメディア、特に新聞とテレビはジュリー藤島氏の動画報告までは報道が低調である一方、X ユーザやオンラインニュースは、BBC 報道時点及びカウアン・オカモト氏の会見の後に大きく反応していた。
- ・ 旧ジャニーズ事務所への考え方をめぐってファンが分断され、それぞれエコーチェンバーを形成していた（図 1 参照）。
- ・ X 上の意見分布に関して、BBC 報道の後は旧ジャニーズ事務所に批判的な意見が多かったが、ジュリー藤島氏の動画報告以後は同社を擁護するグループも形成された。

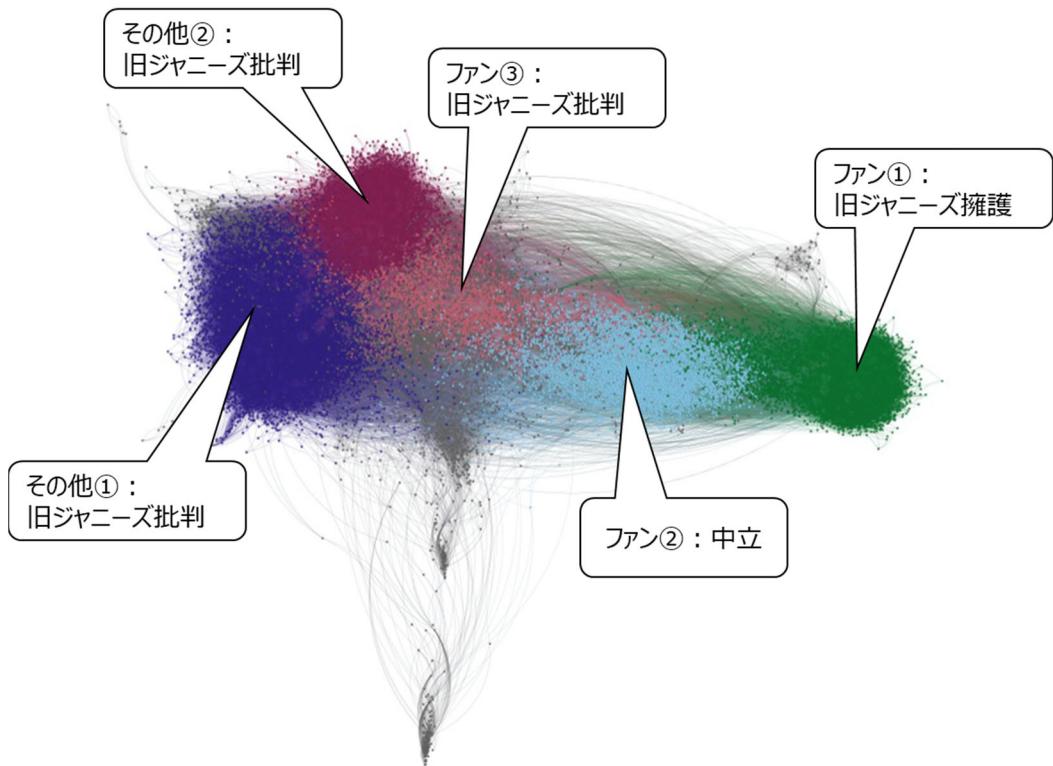


図 1 旧ジャニーズ事務所性加害問題をめぐる X ユーザの分断

X は、国内主要メディアが反応していないくとも、X 上に同じ問題意識を持った仲間がいる時、それはユーザにとって参照集団となり、ユーザが意見表明をしやすい環境を作り上げます。たとえ少数意見だったとしても、未だ「世論」になっていなかったとしても、身近に同志がいると意見を表明しやすくなります。この点において、ソーシャルメディアである X も確かに参照集団としての役割を果たしていました。

沈黙のらせん理論という伝統的なメディア理論が、エコーチェンバーという現代的な理論と絡み合うことにより、不可視化されていた性加害問題を明るみに出し、またそれとは逆に旧ジャニーズ事務所を擁護する言論も生み出しました。

### <社会的な意義>

インターネット無き時代は、世論形成は主としてマスメディアにより行われましたが、現代において

ては事情が異なります。一般の方が、X を始めとしたソーシャルメディアに自由に意見を投稿することができます。そしてその意見はエコーチェンバーによりタコツボ化される傾向にあります。今回の研究では、複数の世論をどう捉えればよいのか、そのヒントが得られたのではないでしょか。

## ＜支援＞

本研究は、科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）（JPMJRS23L1）の支援を受けて行われました。

## ＜論文情報＞

論文名 :	Breaking the spiral of silence: News and social media dynamics on sexual abuse scandal in the Japanese entertainment industry
著者 :	Tsukasa Tanihara, Mitsuki Irihara, Taichi Murayama, Mitsuo Yoshida, Fujio Toriumi, Kunihiro Miyazaki
発表雑誌 :	PLOS ONE
掲載日 :	2024年6月28日（金）05:00（日本時間）
D O I :	10.1371/journal.pone.0306104
U R L :	<a href="https://doi.org/10.1371/journal.pone.0306104">https://doi.org/10.1371/journal.pone.0306104</a>

## ＜用語説明＞

### ※ 1 沈黙のらせん理論 :

ドイツの社会心理学者ノエル＝ノイマン（Noelle-Neumann）により、1970 年代に提唱された理論。沈黙のらせん理論とは、個人は常に世間の意見風土を気にしているということを前提に、自分の意見が多数派と一致していると認識すると、自分の意見を公に表明する傾向が強まるという理論です。逆に、自分の意見が少数派であると認識すると、表明を控える傾向があるといいます。こうした行動傾向を媒介するのが孤立への恐怖です。人々は、自分が少数派に属していると認識した時、意見表明をすると孤立してしまうことを恐れて沈黙するのです。当初は、マスメディアが意見風土のソースとして注目されていましたが、その後の研究で、人々は参照集団を通して意見風土を評価することが示されました。この理論は、世論形成の危険性を示唆しました。つまり、表に現れる世論は多数派の世論になりがちである一方、少数派である異論が人々に届きにくく、健全な言論市場の形成を妨げる可能性があるからです。

### ※ 2 ハードコア層 :

ハードコア層とは、沈黙のらせん理論の発見とともに発見された人々で、たとえ少数派であってもかたくなに自分たちの意見を表明しようとするグループのことをいいます。

### ※ 3 エコーチェンバー :

エコーチェンバーとは、閉じたコミュニティの中で同意見ばかり飛び交う環境に身を置くと、意見が過激化・固定化されるという現象をいいます。X 等のソーシャルメディアにおいては、アルゴリズムにより、ユーザの行動履歴を踏まえてそのユーザに最適な情報ばかりが「おすすめ」として表示され、それに基づいて意見形成がなされる傾向にあります。

以上

---

## ●本件に関するお問い合わせ先

(研究内容について)

立命館大学 産業社会学部 准教授 谷原つかさ

Email. tanihara@fc.ritsumei.ac.jp

(報道について)

立命館大学広報課 担当:名和

TEL.075-813-8300 Email. r-koho@st.ritsumei.ac.jp